

## 「人工知能が変える仕事の未来」を読み終えて

本書は、これから人工知能が産業や社会にどう関わってくるのか、そして自分達の仕事や生活をどう変えていくのかを真剣に理解しようとする方に、確かな答えを提供しています。人工知能の可能性と課題を、その技術の開発とビジネス利用の最前線に立って取り組んでいる著者自身の実体験に即して論じており、人工知能を知識として紹介するハウツー本や、根拠の不確かな未来本とは一線を画しています。本書は、人工知能の本質と分野横断的な特性を論じた第1部、個別領域での活用の実際と可能性を論じた第2部、そして、人工知能の技術開発の今後を展望した第3部から構成されますが、全編を通じて言えるのは、常にユーザー目線に立って、等身大の人工知能の姿を明らかにしようとしていることです。

第1部では、実際のところ人工知能が何を指し、現実の産業や社会の中で、どこまでが実用可能になっているのかを様々な角度から論じています。本書を読めば、話題のディープラーニングについても、それがもたらす意義、可能性、限界を理解し、はっきりと輪郭を掴むことができるでしょう。難しい数式などを一切使わず、この技術の本質を言葉で説明し切れるのは、著者自身がその技術と現実に向き合ってきたからにほかなりません。また、その背景としての第二次人工知能ブームから現在のブームに至る歴史的経緯も、著者自身の生の体験に照らして語られています。著者は人工知能の根底に先人達の「知」の蓄積があることを、肌感覚をもって理解しています。

第2部では、製造業、広告・マーケティング、農林水産業など、具体的な個別領域を掘り下げながら、人工知能がどこまで到達しているのかをより具体的に論じています。類書でも、活用の可能性や事例を情報として列挙した例は少なくないですが、これだけ広い分野に亘って、実際の導入のあり方や課題を具体的にイメージしながら語れる方は見当たりません。これは、学問としての人工知能研究にとどまらず、実際のビジネスを営む企業経営者として、人工知能技術の開発と利用の実践に取り組んできた著者だからこそその視点があるからだと思います。

第3部で触れられているシンギュラリティ論への懐疑論も重みがあります。ホーキング博士をはじめ名だたる著名人が人工知能の暴走に警鐘を鳴らし、それを背景に感情論がないうい混ぜになったシンギュラリティ論が広く喧伝される中、はっきりとした論拠に基づき、正面切って懐疑論を展開しています。ここに著者の勇気と良識が表れています。その上で本当に重要な脅威—例えば、特定企業に世界中のデータを握られてしまう—は他にあり、そこにこそ目を向けるべきと警鐘を鳴らしています。

著者は長年の経験と実績から、現在の人工知能の限界を熟知しています。人工知能は今の延長線上にある限り道具であることを越えないと看破した上で、その意義を次のように鮮やかに論じ切っています。「道具は、人の能力の一部を最初から超えていて当たり前です。そうでなければ道具としての存在意義がありません。」その上で、等身大の人工知能がもた

らすプラスの可能性を、そして世界の中での日本の人工知能の発展の可能性を、熱く論じているのです。

全編を通じて平易に、読みやすく書かれているにも関わらず、人工知能について深く理解することができる一冊だと思います。特に、人工知能の予備知識はないけれども、腰を据えて、リアルな人工知能とその実用化の姿を理解したい読者にとっては、最適な一冊であると思います。私も改めて、本書から様々なことを学ばせていただきました。著者に敬意を表します。

平成 29 年 1 月 5 日

狩野英司